
「総合人間学」(2007年度第3回研究会)

日時：2008年2月16日(土)

場所：東京外国語大学本郷サテライト7階会議室

(1) ドミニク・レステル(フランス高等師範学校)「総合人間学パリ・セミナーについて」

(2) 中谷英明(AA研所員)「総合人間学共同研究プロジェクトの2008年度研究計画について」

報告(1)

「総合人間学パリ・セミナーについて」ドミニク・レステル(フランス高等師範学校講師)

2008年3月25日、26日の両日、パリ人間科学館において総合人間学セミナー「人類史構築における認識転移の生態学」(Ecologie des transferts épistémiques dans la constitution d'une Histoire de l'Humanité)を開催する。異なる領域の研究者、例えば宗教学と脳科学の研究者が、いかにして互いの知識を交換し、両者の総合の下にある知を創出することができるかを検討し、その方法を考察する。異なる領域の知を識別し、解釈を与え、自分の研究の中に同化する方法を検討する。すなわち異なる領域、異なる文化、あるいはまた異なる時代、の知をいかにして転移するかが解明すべき課題である。

この知の転移のためは、実験室、フィールド、文献など、知の創出の場が互いに見えていなければならない。また、現在の知の枠組みの周辺に発展しつつある革新的な知に対して開かれており、それを評価できる体制をとらなければならない。知の転移は当該領域の外にいる研究者には無関係のことと思われがちであるが、実は転移に最も注意を払うべきである。それは、その領域において最も重要なことが隠され、過小評価されていることがそれによって判明することがあるからである。要するに肝要なことは、いかにして専門家が異領域の知を創造的な、方法的に厳密な、慎重な仕方でも自領域に取り込むことができるかを考察することである。知の転移に関する真の機能的生態学の基礎を形成すること、人類の生物的、文化的一般史構築の視点からこの現象を初めて考察することが、このセミナーの目的である。

参加予定者は次のとおり。

【フランス】 Dominique LESTEL (高等師範学校、動物行動学・哲学)

Maurice AYMARD 人間科学館前館長 (近代ヨーロッパ史)

Jean-Pierre CHANGEUX (パスツール研究所、脳科学)

Jean-Claude GALEY (社会科学高等研究院、インド文化人類学)

Wiktor STOCZKOWSKI (社会科学高等研究院、情報言語学)

Jean Louis DESSALLES 国立高等情報通信学校・言語起源情報学)

Pascal PICQ (コレージュ・ド・フランス、考古人類学)

【日本】 中谷英明 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、インド仏教学)

市川裕 (東京大学人文社会系研究科、イスラエル学)

丸山徹（南山大学文学部、日本語学）

<討論>

レステル すべての生物は周りの環境に対して「解釈」を行っており、その意味で自由意志を持っている。これが生物と無生物の違いである。

中谷 その「解釈」は、生物体を構成する物質によって規定されていると考えるかどうか。

レステル 物質的条件は必要条件ではあるが十分条件ではない。生物は物質的条件を超えた「解釈」の自由を持っている。

丸山 「解釈」の意味をはっきりさせる必要がある。

中谷 生物の作る「解釈」は、複雑系であるがゆえの予測不可能性の確率を含むものではあるが、物質的条件に基づくある一定範囲に収まると考えてよいのではないか。それならば人間の物質的基盤を解明することによって、人間の持つ「解釈」の一つである「よりよい生とは何かという観念」をよりよく知ることができると言えるのではないか。

内山 例えば脳の機序の解明が、人造人間を作ることができるほど進んだとしても、人の持つ感情については何一つ分からないのではないか。

中谷 例えば蛇に恐怖感を持ち、草木の緑に安心感を持つのは人類の古い過去の記憶が脳に蓄積されているからではないか。そうすると脳の機序解明が我々の感情のあり方をよりよく理解させることは有り得るようにも思われる。

内山 そうとは思わない。

中谷 今度のセミナーでより議論を深めたい。セミナーでは他に、自然と人間の関係についても話し合いたい。都市化した社会において自然との乖離が進んでいるが、苛酷でも豊穡でもある自然とより密接に接触することが人間にとって必要ではないか。古代インドのバラモン教は、アーリア人が遊牧時代に確立した宗教として自然と密接した生活の中から生まれた。祭式で唱えられる讃歌（それは「ブラフマン」、すなわち「創造力」と呼ばれた）は、常に新しいものでなければならなかった。いわば言葉による自然の切り取り作業を恒常的に行っていた。ところがアーリア人がインドに入って定住し、都市が作られていったとき、自然との乖離が起こった。祭式の讃歌はヴェーダとして編纂され、固定され、言語はその創造力を失った。祭式は「繰り返し」と「言葉の構築物の共同信仰」による脆弱な安心感をもたらすものにしか過ぎなくなった。このような祭式をブッダは捨てたのである。ブッダは祭式に変えて自然の中の孤独な遊行を奨めた。それは自然との触れ合いの回復作業であったと言える。仏教における言葉への不信は、ここから出発している。

内山 古代ギリシアでは言葉は常に人を触発する力を持つものと考えられていた。ところでブッダの「無一物」という考えについてはどう思うか。

中谷 例えばガンジーが国民会議派のネルーと袂を分かつ時にネルーに宛てた手紙は、ウパニシャッドの一節としても誰も怪しまないほどのものである。「無一物」思想はこのような形で現代インドに生きているとも言える。ジャイナ教の裸行派は、衣服さえも棄て、食事を自ら絶って餓死するのが聖人の行き方であるとする。ブッダの「無一物」も、これとは異なるが、やはり徹底し

たものなので、その持つ意味は未だよく分からない。今度のセミナーでは、言語、さらには教育まで含めて討論してみたい。

報告（2）

「総合人間学共同研究プロジェクトの2008年度研究計画について」中谷英明 AA 研

2007年4月からAA研共同研究プロジェクト「総合人間学の構築」3カ年計画が始まった。2年目の2008年度は、共同研究院による論文執筆の年とし、最終年度の2009年度には、その論文を商業出版したい。パリ・セミナーの参加者からも論文をもらって『総合人間学叢書』に収め、さらにその名から何編かを日本語訳して商業出版物に入れたい。

第2回セミナーを2009年春に開催したい。また総合人間学国際シンポジウムを2008年度中に開催したい。テーマや参加者についてこれから詰めてゆくこととする。